

エペソ人への手紙6章10-24節 「主にある力」

1A 戦いにおける力 10-20

1B 悪魔の策略 10-12

2B 神のすべての武具 13-17

3B 忍耐を尽くす祈り 18-20

2A ティキコによる励まし 21-24

本文

エペソ人への手紙6章を開いてください、ついに私たちはエペソ書を読み終えます。始まりの10節が、「終わりに言います」とありますように、パウロが終わりに言いたいことを書きます。それが、「強められる」ことです。今は悪い時代だから、しっかりと強く立っていなさい。そして、あなたがたが励まされるように、という言葉でしめくります。似たような内容を書き記しているのが、ダニエル書です。ダニエルは、異教の国で、その王に仕えていた人でした。これから、神の民にとって困難な時となり、終わりにには大きな戦いが起こる。けれども、彼らは最後には救われる。それで、最後まで忍んで待つ者は幸いである、ということを述べています。パウロ自身の手紙にも、テモテへの第二の手紙に、「終わりの日には困難な時代が来ることを、承知していなさい。」とあります(3:1)。

エペソ人への手紙では、初めにパウロは、キリスト者がどこに座しているのかを教えてくださいました。「2:6 神はまた、キリスト・イエスにあって、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」赤ん坊が、立つ前に、また歩く前に、座ることを覚えるように、私たちが、キリストにあってどういうところに着かせていただいているのかを知ることが、第一です。あまりもの多くの人が、歩むことを先にしようとします。どのように生活すればよいのか？ということをお先んじて学んでいこうとします。それで、キリストにあって、天上にあるあらゆる霊的祝福をもって、神が私たちを祝福してくださった、ということをお知らないで過ごしているのです。しかし、まずそこから知らないといけません。1章から3章までに、そのことが書かれていました。それから次に、歩むことについて学びます。それが4章以降に書いてありますね。召しにふさわしく歩みなさい、異邦人のようにむなしい心で歩んではいけないということなどを見ました。そして、最後、しっかりと強く立つことについて見ていきます。これが戦うことです。猛烈に挑みかかって来る敵に対して、私たちがいかに立ち向かえるか？ということなのです。

午前礼拝で教えましたように、キリストの贖いが行われるというのは、悪魔によって失われた人類と被造物が、再びキリストにあって神の支配の中に入るということです。キリストが血を流し、甦られたことによって、悪魔は決定打を受けました。キリストは、ご自分の力と権威をもって、今の世を征服しておられるのです。それに対する猛反抗が、霊の戦いであります。私たちは、これから勝

のではなく、すでに、世にあって勝利しているのです。しかし、その勝利の中にしっかりと堅く留まるという戦いがあります。

1A 戦いにおける力 10-20

1B 悪魔の策略 10-12

¹⁰ 終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

パウロは、エペソ人への手紙の主題から離れることなく、その戦いを説き明かしています。それは、キリストにあって私たちは、今の私たちになっているということです。強められるのは、あくまでも「主にあって」であります。そして、次に「大能の力」です。パウロの切なる願い、祈りは、エペソの信者たちが、神を知るための啓示の御霊を受けて、聖徒たちに受け継ぐものがどれほどのものであるかを知ること、そして、信じる者に働く神のすぐれた力が、どれほど偉大なものであるかを、知ることができますように、というものでした(1:18-19)。神の大能の力が、イエスがよみがえられたところに現れ、その力によって、神の右の座に着きました。信じる者に、この力が用意されているということです。ですから、私たちが弱い時にこそ、キリストの恵みが現れて、強くなれます。キリスト者の強さというのは、何か自分が良い状況になるということにありません。悪い状況であるにもかかわらず、それでもキリストにある喜び、平安、愛があるということです。

¹¹ 悪魔の策略に対して堅く立つことができるように、神のすべての武具を身に着けなさい。

悪魔は策略を持っています。非常に狡猾です。そこでパウロは、「神のすべての武具を身に着けなさい」と勧めています。すべての武具であり、一部ではありません。もし、「ここまでで良からう」と思って、一部の武器を身に付けなければ、悪魔は狡猾ですから、その身に着けていない部分に一点集中して攻撃してきます。悪魔に隙を見せてはいけません。パウロが、「憤ったままで日が暮れるようであってはいけません。」と勧めましたが、その理由が、「悪魔に機会を与えないようにしなさい。」というものでした(4:26-27)。

今、パウロが鎖につながれていることを思い出してください。彼をつないでいる看守は、ローマ兵であり、彼は間もなくして、一つ一つの武具を挙げていきますが、ローマ兵は戦う時は、フル装備で戦います。兜がなく、戦うことはありません。胸当てがなく、戦うことはありません。兜も胸当ても、腰帯も、履き物も、盾もすべてを身に着けて、剣をもって戦います。フルスペックで戦うのです。

そして、「堅く立つ」という言葉をパウロは使っています。これは、ちょうど自分たちの戦線をこれ以上、後退させないということです。猛攻撃があっても、そこから立ち去らないということです。ダビデの下には、三人の勇士がいました。彼らは、ペリシテ人が襲いかかって来る時も、他のイスラエル人が退いても、そこにいて戦った者たちでした。「Ⅱサム 23:11-12 彼の次はアラル人アゲの子

シャンマ。ペリシテ人が隊をなして集まったとき、そこにはレンズ豆が豊かに実った一つの畑があった。兵はペリシテ人の前から逃げたが、彼はその畑の真ん中に踏みとどまってこれを守り、ペリシテ人を討った。【主】は大勝利をもたらされた。」イエス様は、黙示録の教会に対して、「ただ、あなたがたが持っているものを、わたしが行くまで、しっかり保ちなさい。」と命じられています(2:25)。これから新たに、今までしていなかったことをして戦うのではなく、今、持っているものを保つために、戦うのです。具体的には、福音を福音としてしっかりと保っているということです。

¹² 私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。

午前礼拝でお話しました、私たちの戦いが、このように霊の勢力に対するものだということです。霊の勢力ですから、霊の武器で対峙しないといけません。昔、「ゴーストバスターズ」という映画がありました。それは機械で、ゴースト、幽霊たちを捕獲していくというのですが、説教中である宣教師さんが、「霊を物質で対峙することはできない」と説明していました。全く、その通りですね！霊に対しては霊なのです。しかし、いかに私たちは、そのゴーストバスターズのようなことをしてしまうのでしょうか？肉の武器で霊の戦いを戦おうとしてしまうのです。むしろ、それこそが悪魔の策略です。キリストにあっては、私たちは勝利者ですが、サタンは狡猾に、私たちが肉の手段で戦うように仕向けてきます。そうすれば、私たちはサタンの罠に陥ることになりますから。

ところで、パウロが、「支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するもの」と言っている時は、かなり現実的に語っています。エペソの町には、魔術がはびこっていました。彼の福音宣教の働きで、悪霊が追い出される人々が多く出てきました。魔術を行っている者たちが、その書物を投げ捨てて、焚書にしました。オカルトの世界が生々しく存在していたのです。今、私たちはオカルトの世界を日常で見るとは、意識しない限り、あまりないと思いますが、けれども、あまり目にしないからといって、その背後に悪霊が働いていない、ということではないのです。私たちは、自分たちが意識する以上にはるかに、天使の存在、悪霊の存在があるのだということを知るべきですね。

2B 神のすべての武具 13-17

¹³ ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、一切を成し遂げて堅く立つことができるように、神のすべての武具を取りなさい。^{14a} そして、堅く立ちなさい。

パウロが、「邪悪な日」と言っていますね。これから邪悪な日が差し迫っているということでしょう。5章16節では、「機会を十分に活かみなさい。悪い時代だからです。」と言っていました。いろいろなこと、キリスト者として生きていくこと、福音宣教をしていくのにも困難な時代になるのでしょう。先ほど取り上げた闇の勢力が、ますます強くなっていく時です。イエス様が、十字架に付けられる

前、ご自身を捕えに来た者たちにこう言われました。「ルカ 22:53 しかし、今はあなたがたの時、暗闇の力です。」そのような時にも、対抗できるようにしておきなさいということです。私たちは今、平日の学びで、ダニエル書、そして黙示録を学んでいますが、まさに、この備えをするためです。闇の力がますます強くなるこの頃、しっかりと霊的に武装するために学んでいます。

そして、「一切を成し遂げて」と言っていますね。私たちが最後の最後まで、しっかりと耐え抜くことができるのかが大きな課題です。一切を成し遂げて、それで初めて神の永遠の報いの中に入ります。迫害下にあるキリスト者に対して、ペテロも悪魔が獅子のように食い尽くそうと徘徊しているけれども、次のように励ました。「Ⅰ ペテ 5:10 あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあって永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみの中で回復させ、強く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。」今、受けている苦しみは、あくまでも「しばらくの間」だけあります。その後で回復させてくださいます。強く立たせてくださいます。強くし、不動の者としてくださいます。最後までしっかりと信仰を保っていることができるように、しっかりと神の武具を身に着けるのです。そして強く立ちます。

14 節後半から、17 節までを一気に読みます。^{14b} 腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、¹⁵ 足には平和の福音の備えをはきなさい。¹⁶ これらすべての上に、信仰の盾を取りなさい。それによって、悪い者が放つ火矢をすべて消すことができます。¹⁷ 救いのかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。

これらの武具をまとめてみると、「福音の武装」と言い換えていいかもしれません。実は、彼がこれまで宣べ伝え、教えていた福音のいろいろな側面を、すべてしっかり身に着けなさい、ということです。真理については、福音を真理として語っていました。「1:13 このキリストにあって、あなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞いてそれを信じたことにより、約束の聖霊によって証印を押されました。」そして、正義の胸当てですが、福音については、神の義が啓示されていることをロマ書で論じていましたね。「ロマ 1:17 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。「義人は信仰によって生きる」と書いてあるとおりです。」自分自身の義ではなく、神の義が恵みによって、キリストにあって自分に与えられました。それから、「平和の福音の備え」ではありますが、「キリストこそが私たちの平和です。」と言って(2:14)、ユダヤ人と異邦人の二つを一つにして、新しい一人の人にするのを 2 章で教えていました。それから、16 節の「信仰の盾」は、もちろん、信仰によって義と認められる、救われるということで重要な部分を占めています。そして、「救い」ですね、福音は、罪から、神の怒りから人を救う、神の力です。最後に、みことばですが、福音は、神のことばによって成り立っています。福音を宣べ伝えているパウロが、目の前にいるローマ兵から、その武具を一つ一つ取り上げて、霊の武装をどのようにしていけばよいかを説き明かしているのです。

初めの、「腰には真理の帯を締め」ることですが、ギリシア・ローマの人たちは、チュニック(tunic)という、ワンピースの布でできた上着を着ています。それは膝のあたりまでありますので、仕事をする時や戦争をするなど、体を動かす時には、太ももの途中までまくりあげます。その時の腰のひものこともかもしれません。これは兵士に限らず、ユダヤ人でもだれもが上着としてよくみに付けていたもので、例えばエレミヤに預言を語りなさいと主が命じられた時に、「あなたは腰に帯を締めて立ち上がり、わたしがあなたに命じるすべてのことを語れ」と言われています(1:17)。

福音の真理の帯をもって、腰を締めることによって、すべての動きを開始できます。福音は、人が見目で義とされていることを、決してそうではないことを明らかにします。イエス様が、パリサイ人たちが白い墓で、中身は骨だらけだと言われましたが、偽りの義が多い中で、真実を明らかにします。「ロマ 2:16 私の福音によれば、神のさばきは、神がキリスト・イエスによって、人々の隠された事柄をさばかれるその日に行われるのです。」

そして、「胸には正義の胸当て」とありますが、金属製のもので、伸縮ができるように、何枚もの継ぎ合わせになっています。これによって、人体にとって中心の部分、心臓やその周辺を守ります。敵の攻撃が、絶えず、私たちの義というところにあることを思い出してください。あなたは、義に達していないという責め立てを、絶えず敵は攻撃してきます。そこで、私たちの義なる弁護者キリストが、執り成して下さるのです。「Iヨハ 2:1 私の子どもたち。私がこれらのことを書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなして下さる方、義なるイエス・キリストがおられます。」



次に、「足には平和の福音の備え」がありますが、ローマ兵の履き物は、革のサンダルです。通気性がよく、渡河して濡れた場合も、すぐに乾きます。そして靴底は木製になっていて、釘が打たれています。滑り止めです。

平和の福音のために、自分の足がその良い知らせを運んでいきます。イザヤがこのように預言しました。「52:7 良い知らせを伝える人の足は、山々の上にあつて、なんと美しいことか。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神は王であられる」とシオンに言う人の足は。」私たちが福音を伝える時に、人々に平和をもたらします。その人と神との間の平和、そしてキリストにある互いの平和であります。

次は、「これらすべての上に、信仰の盾を取りなさい。」とあります。いろいろな武具がありますが、これらのさらに上に、盾があります。これは全身を覆うものです。全身を覆うので、パウロはここで、「悪い者が放つ火矢をすべて消すことができます」と言っています。ユリウス・カイサルの下で動いていた、ある百人隊長は、戦いの中で自分たちの部隊だけが生き残っていました。彼はこの盾を持って戦いましたが、目、肩、太ももに矢を打たれてしまいました。しかし、自分の立ち位置を保持することができました。戦いの後、盾の刺さっていた矢を数えたら、なんと 120 本が刺さっていたのです！ここで、悪い者が放つ矢を消すことができるというのは、このような猛攻にも耐えうるということを指しています。



すべてのことについて、信仰を働かせなければいけないことが、ここでよくわかります。私たちの思いに、また私たちの周辺から、悪霊どもが、何とかして私たちに疑いやその他の悪い思い、汚れた思いなどを入れて、魂を傷つけようと必死で動いています。それでも神を信じるとするのが私たちの立ち位置であり、それによってこれらの火矢を打ち消すことができるのです。「ヘブル 11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならないのです。」

そして、「救いのかぶと」です。頭はもちろんのこと、首の後ろの部分や耳の部分、側面も守っています。耳の側面には小さな穴が空いていますので、司令官の命令も聞くことができるようになっています。パウロが、救いをかぶとの形容したのは、私たちの思いに、悪霊どもが救いを疑わせるようなことをしかけてくるからでしょう。また、救いは天から来ます。主ご自身が私たちの救いを完成させるために、天から戻って来られます。救われる望みを抱き続けるので、兜にしています。「ピリ 3:20 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」

そして最後に、「御霊の剣、すなわち神のことばを取りなさい。」ということです。ローマ兵の剣は、

両刃になっています。両側が刃になっています。そして、頭の上に掲げて刀を振るものではありません。盾で自分自身を守りながら、相手の腹を突き刺すものです。

神のことばを語ることによって、人は救われます。「I ペテ 1:23 あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく朽ちない種からであり、生きた、いつまでも残る、神のことばによるのです。」主のことばが、人々の心のあり方を明らかにして、その人が悔い改めに導かれるようにします。「ヘブル 4:12 神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄を分けるまでに刺し貫き、心の思いやはかりごとを見分けることができます。」多くのキリスト者が、人を救いに導くのに、自分のことばの説得で導こうとしてしまいます。福音のことば、神のことばが人を救うのに、相手が福音の真理とは関係のないところで反論し始めるから、それに再反論をしようとして躍起になります。そうやって、その人の魂の救いではなく、その人との議論に勝とうとしてしまうのです。

興味深いエピソードを、チャックが教えてくれています。シカゴの公園で、救世軍の女性が、ドボウ伝道をしていました。ある人がそれを見て、聖書に欠陥があるとして、何か議論をしかけてきました。彼女は言いました、「そのことについては、申し訳ありません、あまり存じ上げないのですが、聖書は、「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。(Iヨハ 1:7)」と書いています、と答えました。そしてその人は、再び聖書に着いて、それを信じるのは馬鹿らしいとするコメントをしましたが、「私にはよくわかりませんが、分かっているのは、「御子イエスの血がすべての罪から私たちをきよめてくださいます。」ということです。このやり取りが何度か続いて、彼は、頭の悪い無知な人々が、キリスト者と呼ぶんだと言いながら、公園を立ち去りました。

しかし、次の日、彼が再びやってきます。「聖書が何と言っているんですか？「すべての罪から私たちをきよめてくださいます。」ということですか？」そのみことばが、彼の思いから離れなくなっていたのです。ついに彼は、主を受け入れました！その赦しを受け入れたとのことです。そういったことで、神の武具のすべてを身に着ける必要があり、神のことばは、その中でも唯一、攻撃用の武器です。

3B 忍耐を尽くす祈り 18-20

¹⁸ あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。

霊の戦いにおいて、福音の中に生き、福音を宣べ伝えることは言うまでもないですが、祈りは、その戦いの中核をなしています。祈りがあって、それで人々が福音に対して心を開きます。ここに、「すべての聖徒のために」とありますね。ローマ兵の武具についてこれまで話してきましたが、ローマ兵が実際に戦う時には、独りで戦うことはまずありません。ここが、キリスト者が今日の社会で、

大いに間違っていることです。個人主義が発達している今日の社会は、信仰も個人のものだとする考えが横行しています。けれども私たちは、教会はキリストのからだであり、私たちは互いにキリストにあって結ばれているので、教会から離れた救いと信仰生活はあり得ないことをお話してきました。

ローマ軍も、ひとり一人が戦うのではなく、必ず部隊が動き、陣形を取って動きます。例えば、テस्टウドと呼ばれる陣形があります。亀を意味するラテン語ですが、亀のように少しずつ前進します。盾を多くの人が天に向けて亀の甲羅のように守ります。左右横の人は横に立ってます。そして最前列の人が前に盾を持って来ます。相手の陣営に近づく時に、猛烈な矢が飛んできますが、これで、戦車が敵に近づくように自分たちを守ることができるのです。これまで見てきた、ローマ兵の武具というのがチームワークがあって初めて機能するように、私たちは互いに執り成しの祈りを献げることによって、初めて機能するのです。



「御霊によって祈りなさい」と言っていますね。御霊の助けによって、初めて私たちは執り成しの祈りに従事することができます。祈り自体が戦いであり、自分の肉の力では継続できないからです。パウロが、肉の弱さについて、御霊が祈りを助けてくださることをロマ書 8 章で、こう述べています。「ロマ 8:26-27 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。27 人間の心を探る方は、御霊の思いが何であるかを知っておられます。なぜなら、御霊は神のみこころにしたがって、聖徒たちのためにとりなしてくださるからです。」困難なことがあれば、それだけ、どこに神のみこころがあるのか分からなくなります。そういった肉の弱さがあるので、御霊が、言葉にならないうめきと共に、執り成してくださるのです。異言は、霊で祈るということが、コリント第一 14 章に書かれています。知性で祈れない時、言葉にならない時、異言の賜物は霊で祈

るのを助けてくれます。もちろん、異言だけが御霊で祈るということではありません。知性で祈る時も御霊で祈ることができます。

そして、「目を覚ましていて」とあります。これは、ゲッセマネの園での、イエス様の血を流す祈りのところで、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、また他の弟子たちが眠ってしまったことを思い出します。その後で、闇の力がやってきた時に彼らは、それに何の備えもなく、逃げ出し、ペテロはイエス様を三度、否むことまでしてしまいました。目を覚ますことが出来ず眠ってしまうのは、単なる怠慢ではなく、ゲッセマネの園では、「彼らは悲しみの果てに眠り込んでいた。」とあります(ルカ 22:45)。私たちに、みこころが分からず混乱して、悲しみに沈んで、眠ってしまうということもありますね。目を覚ますというのは、いろいろな状況の中で、それでも祈り続ける姿勢です。

そして、「忍耐の限りを尽くして」と言っています。執り成しの祈りには、絶え間ない忍耐が必要です。祈りにおいて戦いがあるのは、他の聖徒たちのための祈りです。祈りたいときに祈るというのは、自分の必要であればできるかもしれません。けれども、他者のために祈るのは、忍耐を尽くす必要があります。それ自体が、一つの大きな奉仕の務めです。そして、すべての聖徒のために、と言っていますから、自分にはあまり情報がない人のことも祈るのです。ますます、忍耐を用いなければ祈れません。しかし、その祈りこそが、その人が霊の戦いにおいて勝利を収める大きな爆弾のような役割を果たすのです。

¹⁹ また、私のためにも、私が口を開くときに語るべきことばが与えられて、福音の奥義を大胆に知らせることができるように、祈ってください。²⁰ 私はこの福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています。宣べ伝える際、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。

パウロは、すべての聖徒たちの中に、自分自身のことを含めています。自分のことのためにも祈ってほしいと要請しています。ここで彼は、ローマにて囚人として鎖につながれています。それから解き放たれるように、彼は祈っていないのです。そうではなく、その中にあっても、大胆に語るように、と祈っています。ペテロとヨハネが、捕まえられた時も、教会の人々は、これから捕まえられないようにとは祈りませんでした。「使 4:29-30 主よ。今、彼らの脅かしをご覧になって、しもべたちにあなたのみことばを大胆に語らせてください。また、御手を伸ばし、あなたの聖なるしもべイエスの名によって、癒やしとするしと不思議を行わせてください。」このような脅かしを受けているときにも、大胆に福音を宣べ伝えるように力をくださいと祈っているのです。彼らは神のみこころが何であるかをよく心得ていました。「機会を十分に活かさない。悪い時代だからです。」という勧めが何であるかをよく分かっていました(5:16)。「大胆」というのは、「語ることによって罰せられるという恐れから自由になっている」と言ってよいでしょう。恐れからの自由、みこころを行うための自由を祈っているのです。

19 節には、「口を開くときに語るべきことばが与えられ」るように祈ってほしいと書いています。御霊がそうさせてくださることをイエスは約束されていましたね。「ルカ 12:11-12 また、人々があなたがたを、会堂や役人たち、権力者たちのところに連れて行ったとき、何をどう弁明しようか、何を言おうかと心配しなくてよいのです。12 言うべきことは、そのときに聖霊が教えてくださるからです。」そして 20 節は、「福音のために、鎖につながれながらも使節の務めを果たしています」と書いていますね。鎖につながれても、福音のため、キリストの使節、大使になっているとしての自負を持っているのです。これは、みなさんにも持っていただきたい自負です。どんな状況にあっても、自分がそこで福音のための使節になっているのだということです。

2A ティキコによる励まし 21-24

²¹ 私の様子や私が何をしているかを、あなたがたにも分かってもらうために、愛する兄弟、主にある忠実な奉仕者であるティキコがすべてを知らせます。²² ティキコをあなたがたのもとに遣わすのは、ほかでもなく、あなたがたが私たちの様子を知って、心に励ましを受けるためです。

パウロと共に動いている働き人がいろいろいますが、ティキコはその一人です。彼が、ローマからエペソにこの手紙を持っていくことになります。その目的は、「心に励ましを受けるため」ですね。すでに、パウロは 3 章 13 節で、エペソの人たちが落胆しているだろうと心配していることを書きました。「ですから、私があなたがたのために苦難にあっていることで、落胆することのないようお願いいたします。私が受けている苦難は、あなたがたの栄光なのです。」自分が囚人であるのに、自分のことでかえってがっかりしているのではないかと気づかって、それで励まされたいと願って手紙を書いたのです。主にあって強められて欲しいというのは彼の祈りでした。

ティキコについては、パウロがエルサレムに帰る旅で、同行している者たちの中に数えられています。「使 20:4 彼に同行していたのは、ピロの子であるベレア人ソパテロ、テサロニケ人のアリスタルコとセクンド、デルベ人のガイオ、テモテ、アジア人のティキコとトロフィモであった。」ベレア人、テサロニケ人は、マケドニアからの人ですが、デルベはカッパドキア地方のほうにある町で、テモテはその近くのリステラの人です。そしてティキコは、アジア人として数えられています。まさにエペソはティキコにとって出身のアジア地方です。彼は後に、テモテがエペソで教会の監督の働きをしていたので、ティキコをパウロが遣わすと、テモテ第二 4 章 12 節に書かれています。パウロがネロによって死刑を受けて天に召された後に、残されてテモテと共にエペソを牧会するように遣わされています。

彼は、パウロは、「愛する兄弟、主にある忠実な奉仕者」と書いていますね。キリストにある愛で、結ばれている兄弟です。関係性があります。それに加えて、主にある忠実な奉仕者です。ある時は一緒に仕えているけれども、都合が悪くなったらいっしょに動かない、というような人ではなく、常に、パウロと同じ心をもって、エペソの人たちなどのために仕えていた人であります。忠実であ

ることを、イエス様は報いを受けるために必要なこととして、タラントの喩えで教えています。

²³ 信仰に伴う、平安と愛が、父なる神と主イエス・キリストから、兄弟たちにありますように。

最後の挨拶です。平安と愛があるように、と言っています。平安が足りなかったのだと思います。パウロが牢に入れられて不安だったに違いありません。そして愛です。いつまでもなくなる信仰と希望と愛の中で、もっともすぐれているのは愛であると、パウロはコリント第一 13 章で話していました。

²⁴ 朽ちることのない愛をもって私たちの主イエス・キリストを愛する、すべての人とともに、恵みがありますように。

「朽ちることのない愛」は、永遠の愛、永遠のいのちに裏打ちされた愛です。この愛をもって愛されたすべての聖徒たちは、イエスを同じ愛で愛します。いつまでもなくなる愛です。尽きぬことのない愛です。その人たちと共に、恵みがありますようにと祈っています。

パウロは、手紙の始まりから終わりまで、「すべての人」あるいはすべての聖徒を強調していました。すべてのキリストにある聖徒たちと、一つなのだということ、愛に結ばれているのだということ、を彼は強調しています。私たちが、いかに世界の教会の人々と一つになっているのかを心に留めていく必要があるということですね。

今回は、ピリピ人への手紙です。このエペソ人への手紙と並んで、獄中書簡、つまり、ローマで牢に入れられている時に書いた手紙の一つです。